地域住民のスポーツ活動と地域満足度の関係性に関する研究

木村　心香　（　静岡大学　）

１．目的

本研究の目的は、住民のスポーツ活動実態を把握し、それと地域満足度（SC、地域意識、生活満足度）の関係性についてソーシャル・キャピタル（以下 SC と略す）に注視しながら明らかにしていく。SC はコミュニティ形成において重要な概念とされておりあらゆる学問で用いられている（稲葉 2016 等）。

２．研究方法

１）対象者：A 県 B 市 C 地区の連合自治会に加入している全 2908 戸（一世帯 2 枚配布）。

２）調査方法：質問紙調査法。自治会に依頼し配布・回収を行った。有効回答票は 3478 票であった。

３）分析方法：スポーツ活動の取り組み状況を分類するために、藤井（2016）に倣って基礎集計を行い 3 群に分類した（後述）。また、SC の概念を検証するために探索的因子分析を行った。さらに、スポーツ活動と地域満足度の関連を検証するために一元配置分散分析と相関分析を行った。

３．結果と考察

１）C 地区住民のスポーツ活動別にみた群分け

スポーツ活動状況に従って群分けを行った結果、「未実施者群」1,417 名（42.9%）、「個人的運動者群」868 名（26.3%）、「組織運動者群（エリア運動者、プログラム運動者、クラブ運動者）」1,016 名（30.8%）であった。以後、この 3 群を基準として比較検討を行う。

２）SC 概念の把握

仮説的構成概念に対して探索的因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った結果、3 因子が妥当であると判断した。第 1 因子を「地区内絆」、第 2 因子を「地区外絆」、第 3 因子を「社会参加」と命名した。

３）スポーツ活動 3 群と地域満足度との関係性

スポーツ活動 3 群にて分散分析を行った結果、全ての項目（SC、地域意識、生活満足度）において 0.1%水準で有意であった。そして、Tukey の HSD 法（5%水準）による多重比較を確認したところ、全ての群間に有意な差がみられた。この結果から、地域満足度は運動をしていない住民よりもしている住民、さらには個人的に運動している住民よりも組織的に運動している住民の方が高いことが明らかになった。

４）スポーツ活動と地域満足度の相関

スポーツ活動と地域満足度変数との関連について相関比により検証したところ、全ての変数間で相関が 0.2 以下と弱く、また効果量も 0.04 以下と小さいことが明らかとなった。このことから、スポーツ活動の如何が、即コミュニティ形成に繋がるとは言い難いことが明らかになった。

４．結論

スポーツ活動のタイプ別に地域満足度を検証したところ、組織的運動者群が有意に高い値を示した。しかし、スポーツ活動と地域満足度の関連については、ほとんど相関がみられなかったことから、スポーツの活性化が、即、コミュニティ形成に繋がるとは言えないこともわかった。要するに、スポーツの可能性（人を巻き込む力など）をコミュニティ形成に活かすとするならば、予め、まちづくりの意図を理解しながらスポーツ活動を推進できれば、コミュニティ形成が果たされると考えられる。

５．主な参考文献

１）藤井和彦・石川智，「『個人的運動者』の実態と特性に関する研究」，白鴎大学教育学部論集，pp.357－375，2016.

２）稲葉陽二,「ソーシャル・キャピタルの世界」，ミネルヴァ書房，2016.